

第三十八 日本文章論

文學博士 物 集 高 見

私が今日御話し致さうと致しまする日本文章論は、古文を手本として、かやうの所は、かやうに書くが宜しい、かゝる文字がなくてはをさまらぬなど、申す如き、學者の間に行はるゝ、普通の文章論ではありません、勿論、文章を論ずるには、古人の明文

を定規として、論せねばならぬ事もあり、論ずる事が必用なる場合もありますれど、今日の私のは、さる高尙なるしかけではなく、現在、上下普通に行はれざる文章の上に就いて、感ずる事もあり、實際こまる事もあります故に、其邊につきて鄙見を御話し申して見る積りであります、

皆様も、既に御承知の通り、文章は思想を通ずる機關でありますれば、其機關のよきとあしきとにては、思想のよく通ずると通せぬとの相違を生ずる事は、道理の最と思はれ升が、何故か、世間は、他の機關は、改良に改良を工夫致し升が、大切な思想を通ずる機關には、とんと頓着致されぬやうに、私には思はれ升、實に何故でありますやうか、改良に頓着いたされぬ證據は、今日、文運の盛なりと申す世界にも似合はず、手紙の中に、御面會の上ならでは、筆紙につくしがたしなど、申す文言が常にありますが、これは、他見を憚るといふ意味もありますけれど、そのみならず、よく書きとれぬからといふ意味に多くつかひます、さすれば、文章は思想を通ずといふ、大切な機關といふにも關らず、それが十分に役に立たんでも、改良には、とんと頓着いたされぬのでありませう、尤も文章に關して、唯だの一人も言ふ者がないと申すので

はありません、唯だ前に申した通り、古文を手本としての學問の議論は、随分きこゆるやうであります、私が、今日申すやうなる普通の物には、いまだ聞き及ばんといふのであります、

全體、文章は、思想といふ、一個の事を通ずる機關なりと見ます時は、その機關の形狀は種々に作りかふるにも及ばず、たゞ一個最も宜しき物を拵へおけば、それで足る事と思はれますのに、一個の思想を通ずる爲めに、あれこれ取りかへて用ふるとは、至極不便な事ではありませぬが、機關が種々にありますときは、その種々の機關につきて、一個／＼その扱ひ方を習はねばならぬ上に、種々にありますときは、一旦習ひておいた事も忘るといふ事があります、と申すと、學者先生は、和蘭陀にも文章の體は幾種あり、英佛露米にも幾個あるからとも言はれませうが、私は、他國にはないが、日本にはばかりあるから宜しくないと申すのではありません、どうも、一個の思想を通ずる爲めに、多くの機關を用ふるといふ事が、道理にかなはぬやうに考へらるゝからであります、現に思想を通ずるには、文章ばかりでなく、第一、言語といふもので通ずる事であり、その第一の言語に、聲いろをかふるといふ事はなく、

何事も、ひとつ聲いろですみて居りませう、既に、言語が、ひとつ聲いろですむ事ならば、文章ばかりを、種々にせねばならぬといふ道理もありますまい、文章は、もと言語の筆記でありませう、然るに、そのひとつ聲いろの言語を、筆記する文章に幾通りも用ふるとは、返す／＼聞えぬ道理に思はれます、併し、一樣の言語を、かく數様に書きわくるやうには、いつ頃からなりかけたかといふに、それは考證して見ねば、一寸にはわかりませんが、大むかしは、必らず、種々ではありますまい、種々になりたのは、後世まじり物が出来てからの事でありませう、それは御一新以後には、御一新以前になかつた、歐文直譯のやうな文章も出来て來たのでわかります、そこで今一寸、今日行はれてゐる文體を言うて見ませうならば、

一 詔勅、布告、法律、及び學問技藝等に用ふる文章は、漢字まじりとはいふものの、先づ、漢文の脈を用ひて、國語國字は、ほんのあしらひのやうな姿であります、

一 また、願伺、届は、手紙のやうな文章なれども、手紙とも少し違へば、布告文と手紙との間から生まれたやうな姿に見えます、

一 また、手紙は、御一新以前は男と女との相違ばかりでありましたが、近年に至りて

は男女の相違のある上に、老少の相違も出来たやうに見えます。老少の相違と申すは、老者のはむかし風のおとなしい、恐惶謹言なれど、少者のは過半は論文の體で、漢文と手簡文とを合併したやうに見うけられます。

一また和文と申すは、漢文に對して、日本の文といふ義であります故に、日本に行はるゝ種々の文體を總べていふ稱呼でありませうが、現在學校などで教ふる所ならふ處は、むかしの文と申す中にも、武家の世よりも遙かなる先代に發達した文體であります。學校の和文がかやうになりましたのは、和文の定規として用ふる物が土佐日記、竹取物語の類ひであるからでありませう。

一また翻譯文といふもあります。これは、洋書を翻譯したる文章であります。が、洋書の意味をとりて譯するに、譯すべき適當の文字に困むなどの事からして、直譯のやうな語脈を雜ふる事となり、遂に意味と文字とが別々になり、不消化物を並べたやうな文體をなしたのでありませう。同じ事でも、漢學先生の漢文を譯したるにはこの感じはなく、よくこなれてゐるのは、漢文は千餘年を経て、半分は、日本文となりて居るやうな譯でもありませうか。

一また電信文といふもあります。これは、全く言文一致で、話しのやうに書くものであります。

この他にも、學者社會や、商人社會、または、新聞雜誌などに就いて、細かに吟味をいたしたならば種々さまざまなる文體を見いだすであります。が、既にこの位にても、文章は、今日一樣でないといふ事はわかりませう。かやうに種々なる文章は、抑も、何の目的に用ふるかといへば、前にも申した通り、一個の思想を表出する爲めで有ります。さすれば、何とかして一個にまとまるやうに致したう思はれ、升、これを一個にして、種々の學ぶ事の苦勞を省くは、莫大の利益であります。併し、言ふべくして行ふべからずと、即時に判斷を下す人もありませう。が、私の考へにては、全く出来ないといふ道理もなく、早晩、世間に、此論も起るであらうと思はれます。よし、たとひ、一個にまとむる事は出来ずとも、一個位を減す事は出来るであります。既に、へす事の出来る上には、改良の道の、とんと無いでもありませねば、何とか改良したう思はれます。併し、唯だ改良と申しても、餘りとりとめのなく聞えます。で、私の希望する改良の點をひとつ申しませう。私は、右、種々の文體をどこまでも一個にいたしたく思ひ

より申せば、今日、現在普通の物より學びて、漸々に、上代にも進み及ぼすが、順序よろしく、また、且つ覺り易からんと思はれ、升と申す時は、或論者は、直に言咎めをして、現在普通の物といへば、別に學ぶにも及ばんではないか、學ばんでも話しにはさし支へなく、書きとりの出来ぬでもないでは無いが、貴重の時を、さやうな詮ない事にかくるはと、言はるゝ人も有りませう、或論者は、また口さがなく、筆の序にとて、言文一致に論及して、言文一致論は、文學上の謀反のやうに書きます人もありませう、然れ

ども、右第一の論者が言はるゝやうに、現在普通のものとても、さやうに容易に出来るものではなく、また第二の論者が言はるゝ、言文一致とても同様にて、口から出まかせ、言えらびもせず、方言も何もうちませに他人のわからうがわかるまいが、其邊には頓着なしに書くならば、いざ知らず、動詞の言ひかたより、時の工合、接續詞の用ひ方などを一定して、書かんとする時には、随分、面倒なる事もありて、學ばんで出来るといふ事は、思ひもよらぬ事でありませう、併し、私が、こゝに、今言はうと致しまする、現在普通のものといふは、右論者のいふが如きものではありませう、全く、別の事でありませう、

私が爰で申す、現在普通のものとは、今日、世人の、普通に用ふる言語と文章との事で、その言語と文章とに就いて、學ぶべきところを學びて、さて、上代も及ぼすが、よからうと申すのでありませう、さて、今日、世人の、普通に用ふる言語と文章とを見るに、同じところと異なるところとありませう、斯くいへば、また、言文二途といふやうにも聞えませうが、言文を一致にといふ事は、今日は言はんのでありませう、それで、其異同ありといふ事を申せば、先づ、漢語は口語の上にもあり、文章の上にもあり、故に、此れ